

## 第135回くらしの植物苑観察会 2010年6月26日(土)

## 農事にかかわる植物たち

辻 誠一郎(東京大学・大学院新領域創成科学研究科)

## 暦の中の植物たち

暦のシステムは古代から現代にかけて変化してきました。古代においては、旧年度と新年度の境目が旧暦の2月におかれていて、1年間の農事サイクルの中で転換点にあたっていました。そして、農事サイクルは、要月と呼ばれる農繁期と、祭りや納税、次年度の準備にいそむ農閑期に大きく分けることができたのです。興味深いことは、農業経営が旧暦の暦の上で位置づけられていたことで、現代のような春夏秋冬の気候季節の移り変わりとは年毎に大なり小なりズレというものがあつたのです。古代、万葉集などに語られた植物たちは、主として新暦のシステムで農事が営まれている現代においても、気候季節とぴったり対応しない農事サイクルと密接なかかわりを現代でももち続けているのは、植物季節が農事サイクルにおいて柔軟に受け入れられてきたからにほかならないと私は考えています。また、農事と直接かかわる植物は、まさに稲、麦類、豆類などの耕地に栽培される植物たちですが、それらもまた暦のシステムと関係し、野生の植物たちと密接なかかわりを持ち続けながら、現代までそのかかわりが受け継がれてきたのは、農事にかかわるひとつひとつによって柔軟に受け入れられてきたからだと思えるのです。

今は6月、本州では梅雨の真っ盛りです。1週間の大半が雨天という季節です。農事と直接かかわる植物たち、古くからこの季節になくはならなかった植物たちのいくつかを取り上げて、植物たちとひとつひとつのかかわりかたを考えてみたいと思います。今回は、「夏は来ぬ」に歌われた卯の花(ウツギ)と、ちょうど季節がぴったりの半夏生(ハンゲショウ)と毒溜(ドクダミ)を中心に、青花(アオバナ、オオボウシバナ)と紅花(スエツムハナ)や、紫陽花(アジサイ)なども見てみたいと思います。

## 卯の花・空木、ウツギ

佐々木信綱の作詞した「夏は来ぬ」の歌詞「卯の花の匂う垣根に、時鳥早も来鳴きて、忍音もらす夏は来ぬ」は私も小学生のころ、そのすがすがしさのためかとても好きだった歌の一つです。この卯の花の垣根は、関東平野でも群馬など郊外に出掛けてみるとしばしば屋敷の境界や畑の境界にぽつりぽつりと見かけることがあり、今も生き続けているのです。青森県の下北に出掛けた折、屋敷や畑の境界に、まさに連綿と繋がる生垣を確かめることができました。この生垣はどのような意味をもっているのでしょうか。私は、境界を明示するだけでなく、邪悪なものが侵入してこないためのもの、つまり卯の花に邪気を追い払うパワーがあると考えられたからと考えています。この頃は、田植シ

一ズンで、すでに田植が終わって苗も大きくなろうかという時期ですが、水田の水口に卵の花の白い花々の着いた枝を何本も突き刺している光景を見たことがあります。また、古墳時代や江戸時代の遺跡発掘調査で、当時の水田の角っこ、おそらく水口に細い枝が何本も立っているのを不思議に思って、樹種を調べてもらったら、それはやはり卵の花でした。稲に邪気が宿らないように、つまり悪い虫が付かないように願ったのではないのでしょうか。卵の花は、ちょうどこの頃、真っ白な花々が枝に密生していて、それがあたかも収穫期の枝もたわわに実った稲の穂に見えるのです。春の代表的な花である桜が、正月行事の中で、稲の実りに見立てて予祝に用いられているのと同じなのではないでしょうか。正月は、一年の願いを、そして田植の頃は苗がすくすくと健全に育っていくように願いを込めてきたと考えられるのです。

#### 半夏生と毒溜、ハンゲショウとドクダミ

半夏生を見かけることはあまりありませんが、もう一つの毒溜は、今でもいたるところで見ることができます。ドクダミを毒溜と書いたのは私なりの解釈によりますが、群生していることが多く、しかもそばに寄るだけで毒々しい香りを放っているからですが、このように考えている人もかなりいるようです。それでも毒溜は、けっして嫌われ者であるわけではなく、刈り取られて軒下に吊るされている様子はしばしば目撃するところではあります。これは民間薬として古くから用いられてきたと考えられる毒溜茶をこしらえるためです。梅雨の頃の農家の作業でもあるのです。

半夏生は農事暦にも組み込まれた「半夏生ず」に深くかかわってきた植物で、花に近い2ないし3枚の葉が葉緑素を失って部分的に白くなることから半化粧などと表現されたりしてきました。二十四節気の重要な一つである夏至から11日後の7月2日、すなわち末候が「半夏生ず」にあたります。この日までに田植は終わっているべしといわれてきたのです。

半夏生と毒溜を併記したのにはわけがあります。それはどちらもドクダミ科という同じ科に属していて、その分布も特異だからです。日本を含む東アジアにはどちらも自生していますが、半夏生のなかまは北米にも分布しているのです。これは、ドクダミ科がかつては北半球に広く分布していたのが、その後の環境変動によって東アジアと北米に引き裂かれ、遠い距離を隔てて辛うじて生き残っていることを示しているのです。そのいずれもが、初夏の梅雨と、そして農事にも深く関係しているのは面白いことです。

.....

**次回予告** 第136回くらしの植物苑観察会 2010年7月24日(土)

「江戸の変化朝顔」 岩淵 令治(当館研究部歴史研究系)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要